

欧州参照枠 (CEFR) と日本の英語教育

八木 克正
(関西学院大学)

中高の英語教育の指針である「学習指導要領」が改訂され、高等学校の英語教育は、さらにコミュニカティブな方向へと舵をとる。そのような方向への移行に対する反対がいろいろな形になって発信されている。以下にその主なものをあげてみよう。

- 多言語主義論 (英語一辺倒反対, 韓国・中国語学習の機会も必要だ)
- 母語である日本語の重要性 (日本語が減じる)
- 英語帝国主義論 (英米の価値観の世界支配)
- 英語教育不要論 (言語教育は日本語中心にすべきだ)
- 小学校英語教育導入反対 (教育体制の準備不足)
- 社内英語公用語反対 (日本語母語話者は英語で思考はできない)
- 英語社内公用語より通訳利用推進論
- コミュニカティブな英語教育反対論
- 文法重視論

これらの意見は、引用文献の中で述べられている。伝統重視の日本の英語教育を勧める立場、多言語主義の立場からの英語一辺倒に反対する立場、日本人は英語を自由にあやつる必要はない (あるいはあやつるようにはならない)、日本人には日本語教育こそが重要だ、といった考え方があつた。

これらの意見をひとまとめにして論じるわけにはいかないのだから、「コミュニカティブな英語教育反対論」とその根底にある「文法こそ英語力の基礎」「伝統的な英語教育賛美」に対して一言だけ述べておく。

英語教育をコミュニカティブな方向へ移行したことで、英語学力が低下したという。その根拠は多くはないが、大学入試センター入試英語の第二問 (文法に関わる部分) の点数を見ると、1997年度から「ガク」と点数が下がり、そのまま回復の兆しがない、といった議論である。

英語の学力が低下したかどうかを述べるためには、もっと精緻な調査が必要だと思うが、それは別にして、日本の教育全体をめぐる情勢がここ 15 年間程で大きく変化していることは見逃すことはできない。

まず、社会情勢では、受験戦争反省の中で、教育の中身の 3 割軽減、18 歳人口の逡減と大学進学率の増加、大学全入に近い状態での競争の低下を考えねばならない。

教育現場の混乱として、「コミュニカティブな英語教育」とは何かについての理解不足 (例:「文法をやればコミュニカティブな英語力がつく」) といった根拠の薄い議論が与える影響がある。

生徒・学生の意欲の変化も見逃すことはできない。とりわけ学習者の英語に対する考え方の変化がある。英語が必要といいながら、実際は将来必要だと思う人しか英語学習に熱心

になれない。

このような状況の中で、古い文法事項を教えることに熱心であったり、日本語訳ばかりが中心になっていると、それこそコミュニケーションな方向への英語教育の転換はありえない。

その中で、欧州共通参照枠 (Common European Frame of Reference for Languages) が日本でも知られるようになった。言語の学習や評価などをする場合に、文法事項でレベルを考えるのではなく、当該言語を使って何ができるかという観点からレベル分けをしたものである。このレベル分けは、極めて合理的であり、参照すべきものがある。

英語を使って何ができるか、というのはまさにコミュニケーション能力を見ることである。日本の英語教育もその方向へと向かって欲しいと思う。

参考文献

- 江利川春雄 (2008) 『日本人は英語をどう学んできたかー英語教育の社会文化史』 (研究社)
- 江利川春雄 (2009) 『英語教育のポリティックスー競争から協同へ』 (三友社出版)
- 江利川春雄 (2010) 『受験英語と日本人』 (研究社)
- 古石篤子 (2009) 「もっと豊かな言語教育を」 大津由紀雄 (編著) (2009)
- 成田 一 (2010) 「英語の社内公用語ー思考で及ばず, 情報格差も」 『朝日新聞』 (私の視点) (2010/9/18)
- 成田 一 (2010) 「社内公用語化と英語教育」 『英語教育』 2010年12月号 FORUM.
- 大谷泰照 (2007) 『日本人にとって英語とは何かー異文化理解のあり方を問う』 大修館書店.
- 大津由紀雄 (編著) (2009) 『危機に立つ日本の英語教育』 慶應義塾大学出版会
- 大津由紀雄 (2009) 「戦略構想」, 「小学校英語」, 「TOEIC」ーあるいは, ここが正念場の英語教育」 大津由紀雄 (編著) (2009)
- 斎藤兆史 (2009) 「日本の英語教育に学問の良識を取り戻せ」 大津由紀雄 (編著) (2009)
- 寺島隆吉 (2007) 『英語教育原論』 明石書店.
- 寺島隆吉 (2009) 『英語教育が亡びるときー英語で授業のイデオロギー』 明石書店.
- 津田幸男 (2009) 「日本人は英語が使えなければならないのか?ー「英語信仰」からの脱却と「日本語本位の教育」」 大津由紀雄 (編著) (2009)
- 鳥飼玖美子 (2010) 『「英語公用語」は何が問題か』 角川書店.
- 山田雄一郎 (2005) 『日本の英語教育』 岩波新書.
- 山田雄一郎・大津由紀雄・斎藤兆史 (2010) 『「英語が使える日本人」は育つのか?』 (岩波ブックレット No. 748) 岩波書店.